

オフサイド・ガールズ

2007(平成19)年7月19日鑑賞〈東宝試写室〉

★★★



監督・製作・編集＝ジャファル・バナヒ／出演＝シマ・モバラク・シャヒ／サファル・サマ
ンダール／シャイヤステ・イラニ／M. ケラバディ／イダ・サデギ／ゴルナズ・ファルマ
ニ／マフナズ・ザビヒ／ナザニン・セディクジャザデ（エスパース・サロウ配給／2006年イ
ラン映画／92分）

……オーストラリアを破ったオシム・ジャパンは今、アジアカップの準決勝
そして決勝戦を目指して調整中だが、2006年、2回目のワールドカップ杯出
場を決めたイランでは、スタジアムに男装してもぐり込んだ少女たちが大変
な目に……？ 1979年のイスラム革命、アフガンやイラクに続くアメリカに
よるイランに対する核開発疑惑、そういう現実問題の理解を前提としながら、
この映画では「女性はスタジアムに入れない」という、いかにも時代錯誤的
なイスラムの教えにメスを入れてみよう……。ちなみに、これを観れば日本
の女性や少女たちの価値観も大きく変わり、日本がいかにもいい国か、そして
日本の男性がいかにもやさしいかを痛感するのでは……？

オシム・ジャパンは今……？

2007年7月23日現在、サッカーのアジアカップでオシム・ジャパンはオーストラ
リアを破って4強入りを決め、25日にハノイで行われる準決勝に向けて目下調整中。
他方、準々決勝で韓国と対戦したイランは、0 - 0で迎えたPK戦で敗れ、無念の敗
退。

日本では地域に根ざした活動スタイルを展開しているサッカー人気は、プロ野球の
お手本とされている面もあるが、人気はやはりまだ野球の方が上……？ しかしイラ
ンでは、サッカーは国民的スポーツ……。

この映画のテーマは……？

この映画はイランの女性差別問題をテーマとしたものだが、それを真正面から深刻に描いたものではない。それとは逆に、ドキュメンタリータッチでユーモアたっぷりに、「なぜ女はスタジアムに入れないの？」と問題提起したところがミソ。

イランのサッカーチームが過去ワールドカップ杯に出場したのは1998年と2006年の2回だけ。したがって、イラン代表が2006年のドイツワールドカップ杯出場をかけて、バーレーンと戦う大事な国民的行事に、女だからという理由だけでスタジアムに入れないのはおかしい。そう考えた少女たちがたくさんいたのは当然。

この映画には、そう考えて実際にスタジアムに駆けつけながら逮捕されてしまった6人の少女たちが登場する。そして、そんな彼女たちのイランチームへの熱い思いと、彼女たちの「なぜ女はスタジアムに入れないの？」という質問に戸惑いながら、次第に軟化していく(?) 兵士たちの姿は絶品！ 狭い日本の中でワンパターンの映画ばかり観るのではなく、たまにはこんな異国色タップリで、ユーモラスなイラン映画も観てみたいもの……。

三大映画祭を制覇したジャファル・パナヒ監督だが……

この面白い映画を監督したイラン人のジャファル・パナヒは、①デビュー作『白い風船』(95年)でカンヌ国際映画祭カメラドール(新人賞)、国際批評家連盟賞を、②『チャドルと生きる』(00年)でベネチア国際映画祭金獅子賞(グランプリ)を、③本作でベルリン国際映画祭銀熊賞(審査員特別賞)をそれぞれ受賞し、世界三大映画祭を制覇した大監督。

ところが、ジャファル・パナヒ監督はこれまで一貫して戒律の厳しいイランで生きる女性たちを描いてきたため、国外の映画祭では大評判となり名誉ある賞を受賞しても、彼の映画はイラン国内での公開は許可されていないとのこと。これは、中国の第6世代を代表する賈樟柯監督^{ジャ・ジャンクー}の映画が長い間中国国内で上映禁止とされていたのと同じようなもの。ちなみに、賈樟柯監督^{ジャ・ジャンクー}の初期の作品である『プラットホーム』(00年)も『青の稲妻』(02年)も中国での上映はダメで、『世界』(04年)がはじめて中国国内での上映が認められたもの。しかして、2006年のベネチア国際映画祭で金獅子賞(グランプリ)を受賞した最新作『長江哀歌』は……？

せめて「イラン革命」の理解だけは……？

あなたは、インドとパキスタンの以西そしてアフリカ半島の東にあるサウジアラビアなどのアラブ諸国の位置関係が、少しは頭の中に入っているだろうか……？ 島国ニッポンでは、石油資源をすべて外国に頼っているにもかかわらず、平和でノー天気な日本人はそんなことを全く知らない人が多いはず……。

ちなみに、アメリカが2001年に戦争を仕掛けたアフガニスタン（アフガン）はパキスタンのすぐ西にある国。また、2003年に予想以上のスピードで陥落してしまったフセインが支配していたイラクは、イランのすぐ西側にある国。そしてイランは、東がアフガニスタンに、西がイラクに接しているという地理的に微妙な位置にあるうえ、面積がアフガニスタンの約2倍、イラクの約4倍という大きな国。

今、アフガニスタンとイラクに続いてイランの核開発問題がアメリカから問題視され、北朝鮮以上のアメリカの関心事となっているのはご存知のとおり。現在のイランすなわちイラン・イスラム共和国が生まれたのは、1979年にイスラム法学者ホメイニーが、当時近代化・西洋化を進めていたパフラヴィー王朝を倒して、イスラム教シーア派原理主義を中心とする政治体制を整えたことによって成立したもの。そしてこれが、「イスラム革命」と呼ばれるものだ。詳しいことはさておき、これくらいの前提知識は一般教養として持つておかなければ……。

逮捕にも、本音と建前が……？

この映画に登場する6人の少女たちのキャラはそれぞれに面白いが、A子さんは〇〇、B子さんは△△と1人ずつ紹介するのはちょっとしんどい。またそれは、あなたが映画を観ればすぐにわかるものだから、是非直接自分の目で確認してもらいたい。

面白いのは、スタジアムへの入場チェックの段階で、こいつは女が変装して入場しようとしているとわかった場合はすぐに逮捕したうえ、全員まとめて次の処分のため分隊行きのバスに乗せることになっているのだが、その逮捕と分隊行きを実行するはずの兵士たちにあまりその任務感が見えないこと……。つまり、命令だから仕方なしにやっているものの、自分たちもホントはサッカーの試合を見たいし、何のために少女たちを逮捕して分隊送りにしなければならないのか、あまりよくわかっていないと思われるわけだ。

したがって、現場では「逮捕」という概念とは全く合わないだらけた状況(?)が生まれるとともに、試合が白熱してくると、何と試合を覗き見る兵士たちによる実況中継がなされ、少女たちはそれに一喜一憂することに……。やっぱり、徴兵制の下で兵士となっているイラン兵士たちも、ホントはこんなくだらない任務はやりたくないというのが本音……？

逮捕される少女あれこれ

この映画の冒頭は、スタジアムに向かうバスの片隅に1人ひっそり座っている1人の男、いや実は男の服装をした少女が焦点。旗を振り、応援歌を歌って騒いでいる多くの乗客はそんな彼女に気づかないが、1人これに気づきジロジロと彼女を見ていると、少女はそれに対してムキになって反発を……。スタジアムに向かうバスの中に、男に変装した少女が乗っているのはこのバスだけ……。実はそうではなく、すぐ横を走っていくバスにも明らかな男装の少女たちが……。この様子では、女は入れないはずのスタジアムの中に何とかして入ろうとしている少女たちはたくさんいそう……？

冒頭に登場したバスの中の男装の少女はかわいい顔立ちで誰が見ても女の子とわかるから、この際大いに損……。しかし、その後逮捕された姿で登場する男のような女の子や、兵士の制服を着込みかなりの時間いい席で試合を見ていたという少女を見ると、男顔タイプだから、変装は比較的容易。女性としてどちらが望ましいかはともかく、男に変装してサッカーの試合を見るには、どちらかという美人系・かわいい系よりも男顔の方がトク……？

そんな目で、逮捕された6人の少女を比較対照してみるのも、ジャファル・パナヒ監督がユーモラスに描くこの映画の1つの見方かも……？

状況が一変 その1

そんなダラけていた逮捕劇と実況中継が一変したのは、トイレに行きたくて我慢できないと訴えた1人の少女を、隊長が仕方なく許可したことに端を発したもの。女禁制のサッカースタジアムに女性用トイレがあるはずないから、男子用トイレで用を足すことを前提に、1人の若い兵士の監視の下に少女はトイレに入ったが、当然スタジアム内のこのトイレには次々と観客たちが……。兵士は無理矢理これを阻止していた



が、そこで混乱が生じるのは必至。

そして、そんな混乱に乗じて少女が一瞬のスキを見て逃げってしまったから、さあ大変。このままでは見張り役の若い兵士も現場の責任者となっていた隊長も、大目玉を食らうことは明らか。これによって、それまでわりとダラダラしていた逮捕現場は急に引き締まることに……。

状況が一変 その2

次に状況が一変したのは、イランがめでたく勝利した熱狂の中、分隊行きのバスが到着した時。これによって、それまでのナアナアの雰囲気は一掃されて、逮捕—裁判—刑事処罰という現実が目の前に見えてきたから、さすがにそれまで陽気にはしゃいでいた少女たちも顔つきが一変することに……。とりわけ、イラン兵の制服を着込んでうまく周囲を騙していた少女は、将校の制服を着ていたら死刑になるのでは、という恐怖を含めて態度が豹変し、青い顔に……。

そして、彼女を何とか慰めていた他の少女たちも、ラジオの実況中継をつけると叫んでいたそれまでの威勢の良さはなくなり、一様にシュン太郎に……。イランが勝利してワールドカップ杯に出場する勇姿を見たい。たったそれだけの気持で男に化けてスタジアムに入ったことが、自分の一生を台無しにするような刑事処罰の対象となるなんて……。そんな現実を目の前にすれば、それまでワイワイと騒いでいた状況が

一変したのは当然……。

冒頭もバス、ラストもバス……

映画冒頭のバスのシーンは前述したとおりだが、この映画のラストもバスの中。逮捕された少女たちの要求によって、壊れたバスのラジオのアンテナを一生懸命直したのは、兵士たちの隊長だった。そして、そのラジオから聞こえてきた実況中継は、少女たちをそして護送していた兵士たちを有頂天にさせる、ロスタイム終了—イラン勝利を伝えるものだった。

すると、そのニュースを聞いたイランのまちがどこもお祭騒ぎとなったのは当然。道路沿いのあちこちの施設ではお祝いのパレードが開始されるや、道路上にはイラン勝利を祝った民衆がくり出すわの騒ぎで、分隊に行こうとしていたバスもたちまち立ち往生。また、止まったバスの周りにはイランの勝利を祝う群集で溢れているのだから、バスの中の少女たちはもとより、兵士たちだってそれを祝わない手はないはず……？　そこで展開されるイラン国民挙げてのお祝いシーンは、まさにこの映画のハイライトでありクライマックス！

このお祭騒ぎが終わった後、逮捕された6人の少女たちがきちんと処罰されたのか、それともうやむやのうちに処分が終わってしまったのか、それが私の興味的だが……？

2007(平成19)年7月24日記